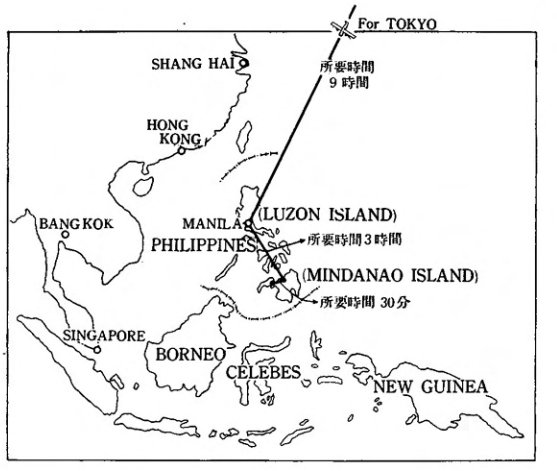
「ホテル フィリピナス」新館の玄関

フィリピン紀行



地質調査所物理探査部柴藤技官は　32年7月にフィリピン・ミンダナオ島における明治鉱業の鉄鉱調査団に参加し　同年11月末帰国したので　かたぐるしい話を抜きにした　フィリピン調査こぼれ話を聞いてみた

私たち鉄鉱調査団一行10名は　昭和32年7月1日夜10時　SAS機をかって　フィリピンのミンダナオ島　ザンボアンガ・デルスール（Zamboanga Del Sur）のミッチヤリップ地区における鉄鉱床を調査するため　羽田空港から飛び立った.

翌朝5時過ぎには早くも　マニラ飛行場に着陸し　朝もやがたちこめる早朝のマニラ市街を　直ちに Hotel FILIPINAS へと車を走らせた.

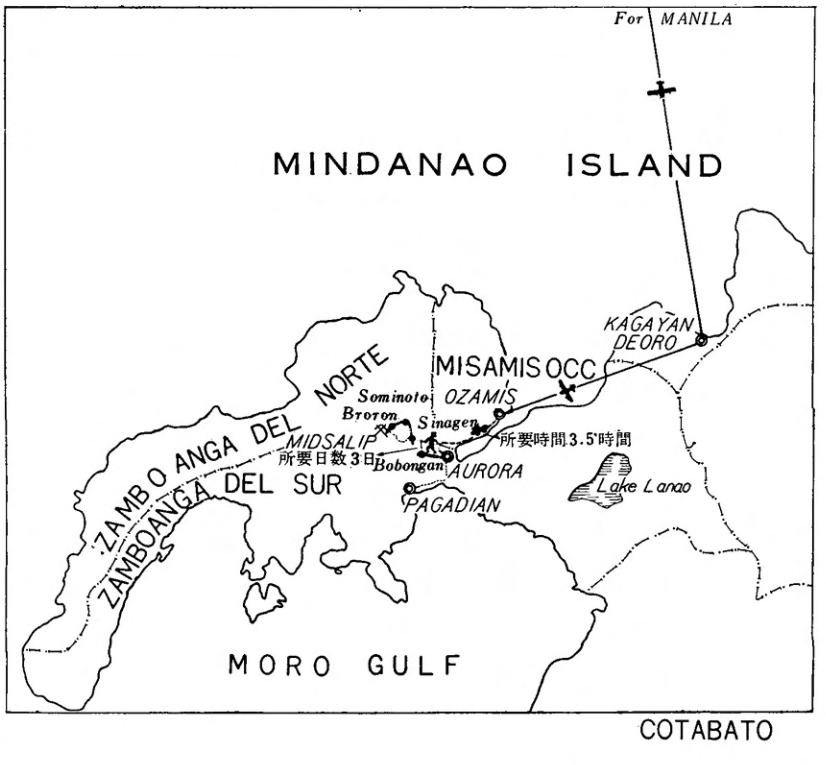
マニラへ来てみると　市内の対日感情はまあまあと言うところではあるが　物価は驚くほど高くて日本内地の3倍ないしそれ以上と思われる.

マニラ滞在約10日　その間にすべての調査準備を終えた一行は7月11日PAL機でカガヤンへ行きここで小型機（約20名乗り）に乗り換えてオサミスへ飛んだ.

オサミスの町は飛行場から車で15分ぐらいの所にあって　町の主な交通機関は馬車（タルタニーラ）である.

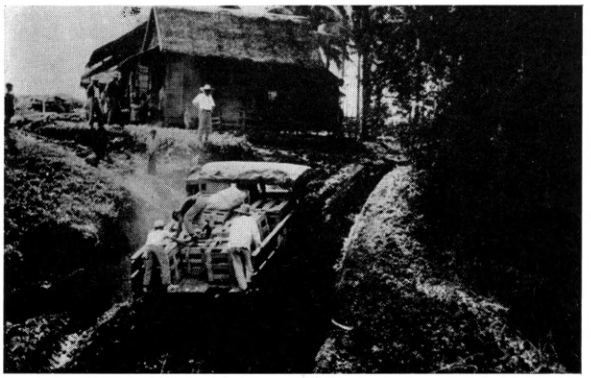
また町の中をフィリピン特有の哀調を帯びた音楽が流れ　土地の様子や土民の顔は　あたかも西部劇を思わせるような感じをあたえる.

私たちはここで　船便によるマニラからの調査荷物約250個を受けとり　トラックにて高原の町「アオロラ」を経由して　「ボボンガン」へと向かったが　アオロラからボボンガンの間の　道路はきわめて悪く　わずかに特殊トラック（戦時中に弾丸・食糧などの輸送に使ったもので　タイヤにはチエーンが巻いてあり　ヘッドのウ



インチで　ワイヤロープを大木にかけて巻きとりながら急傾斜を前進する）が動く程度で　道路というよりはむしろジャングルの通路といつた所で　降雨の際は　特殊トラックもスリップが激しく　全くその機能を停止してしまう.

やっとの思いで　ボボンガンに全部の荷物を集結させてみたものの　これから調査地「ミッチヤリップ」までのジャングル地帯が大変で　トラックでは入ることができないので試錐機などの重い荷物は分解し　できるだけ小さくまとめた.

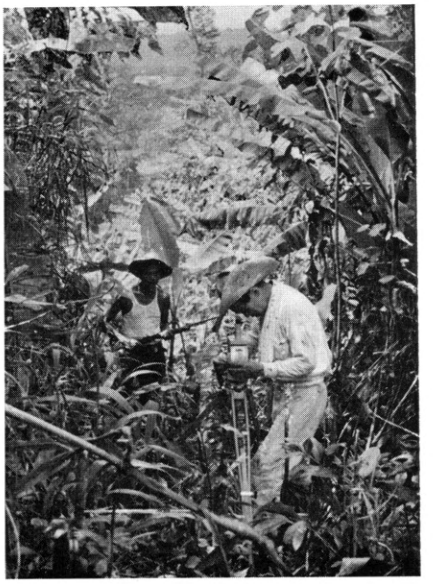


急峻な悪路を特殊トラックで調査荷物の運搬（ウインチで巻上げている）

馬の腹まで泥水にひたりながら　ミッチャリップへ前進する

水牛に「ソリ」をひかせて荷物を運ぶ

これからの搬入は　重い荷物は水牛にそりをひかせ軽いものは馬の背や人の頭に乗せて運び調査団一行10名は全員馬に乗つてミッチヤリップへと前進した.



小銃をもった護衛をつれての磁気探査（柴藤技官）

ジリジリと皮膚をこがす灼熱の太陽　ぬかるみの沼地帯　急斜面　河川等のジャングル地帯を切り開きながらの悪戦苦闘の輸送のため沼地帯では　馬の腹まで泥の中に沈まりながら　一歩また一歩と前進を続け　また河川の急流では　転倒し　荷物を水浸しにしたり　急斜面では馬が数回スリップして崖からあぶなく人馬もろ共転倒しそうになつたりしながらも　目的地へと進んでいつた.

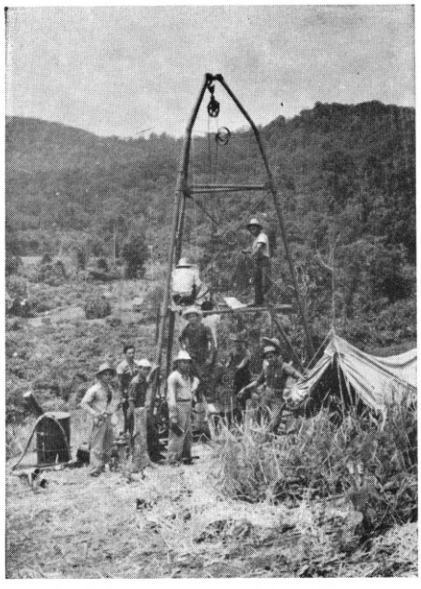
ボボンガンからシナゲン・ソミノート・ブロロンなどの小部落を通過し　目的地ミッチヤリップに無事到着した時は　人馬ともに疲労はその極に達した.

ミッチヤリップでは　調査団用の家が建てられていたが　この家屋は 9m×20m の堂堂たる？　大建築で　ラワンの木の荒割板で床や壁をつくり　屋根はヤシの葉でふいてある床の高い建物である.

家の内部は　中央に寝室兼居室があり　その周囲に食堂・台所・食料品倉庫・物品倉庫・シャワー室・事務室・医務室などが作られている.

床下には　機械倉庫・食料倉庫などがあつて　少し離れたところに　発電機室・便所などがある.

室内には螢光灯がともり　シャワー室と台所には水道もあり　その他ラジオ・電気洗濯機・石油冷蔵庫を備えジャングル地帯では王侯のような設備であった.



ボーリングによる調査

従って　近くは勿論　遠くの土民まで弁当持参で何十里の道をものともせず見物にくる有様であつた.

現地では調査団のほかに60名近い人夫や　鉄砲を持った10名の警護人（モロ族や猛獣などの外敵を防ぐため）が　キャンプ地の中に小屋を作って生活を共にした.

雇用している人夫はセブ島・ネグロス島・ミンダナオ島などの原住民が大部分で　非常に親しみやすく　忠実でよく働く.　また非常に陽気であった.

人夫の使用している言葉は　主としてビサイヤン語かタガログ語であるが　英語も大多数聞きわけることができる.　英語はスペイン系の英語で（r）をドイツ語のように発音するのが特長であった.

なお　キャンプができると　いつのまにかその周囲の森林は切り開かれ平原となり　キャンプ周辺には売店ができて　小部落が出現した.

鉄鉱調査は次の４班に分かれ　毎朝７時から規則正しく仕事が開始された.

1. 地　質　班
2. 試　錐　班 ― 移転設置班 / 掘さく班
3. 測　量　班 ― 伐　木　班 / 測　測　班
4. 物理探査班 ― 刈　払　班 / 測　定　班

各班には　日本人が１名づつ班長となり　必要に応じて人夫が配属され　人夫は班ごとに色別されたマークと番号とを胸につけ　また各班には鉄砲を持った護衛が１名づつ配属された.

調査地の大部分はジャングルで　地形は相当険しくひどいところは40度位の傾斜があって　磁力計を持って前進するのに相当の時間がかかる.

また　調査区域が 20km×1.5km の相当広い面積なので　キャンプから現場に着くまでには数回急な坂を上下せねばならない.　そのため着ているシャツの汗を何回

河をわたって調査にでかける

調査団一行の宿舎

宿舎でいこいの一時

小型錦蛇を生け捕る

となく　しぼらねばならぬ有様であった.

また　直径 1m 以上もある巨木が測線上に縦横無尽に倒れているので　嫌でもよじ登って進まねばならない.

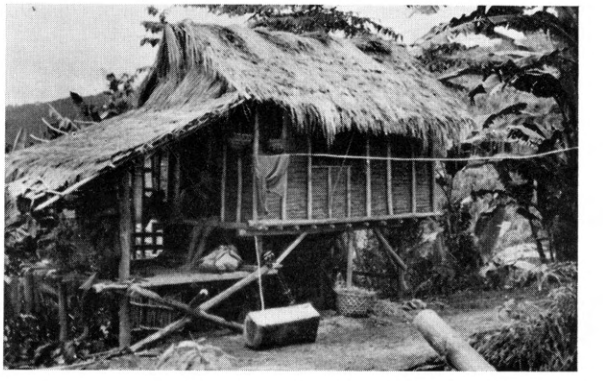
地質は　石灰岩　玢岩　花崗閃緑岩であつて　鉄鉱床は石灰岩と玢岩　または花崗閃緑岩との接触交代作用によってできた鉱床である.　また　上記の岩石のほかに広い地域にわたって　変質岩が分布し　土質はほとんど粘土質である.

現地には蛇がきわめて多く　蛇を見ぬ日はまれで　そのため相当神経を使つた.　種類は多くて　錦蛇は人間の胴体程の直径をもつている大型のもいるが　普通は直径 10cm 前後である.　また小型では猛毒をもったコブラをはじめ有毒の蛇が多い.　このほかに動物としては羽根のあるキツネ・2尺前後のトカゲ・野性ブタ・鹿・猿などである.　なお　ジャングル中には沢山のヒルがいて　知らぬ間に手足の露出している部分にくっついて血を吸うので大変悩まされた.

その上　やっかいなことにはマラリヤ蚊が多く　マラリヤの根源地と言われ　土民でマラリヤにかかっている人が非常に多かった.　しかし　現在は予防薬に良いものがあるから　薬をのんでいれば大丈夫のようである.

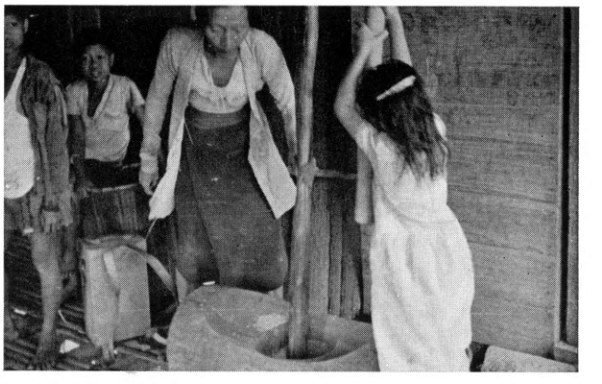
近くの住民は「ソバノ」という原始的民族で　粗末な床の高い小屋に住んでいる.　家の中には家具・衣類・道具などなにもなく　ただ雨露をしのぐだけの目的で家を使用している感じがする.　また　ぼろぼろの衣類をまとい　裸足で　そのほとんどが米と野菜を作り　自給

人夫小屋



ソバノ土民の家

現地小学校の生徒たち



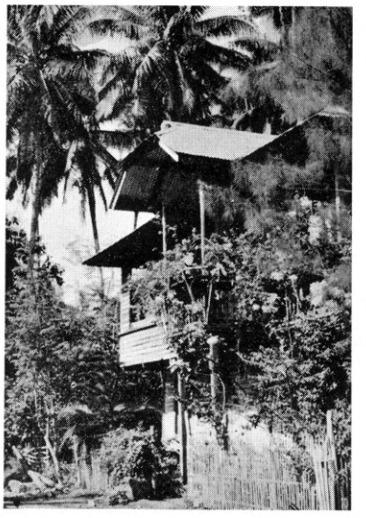
ソバノ土民の米つき

自足の生活をしている．　何か良いことがあるとすぐに鐘と大鼓をたたいて踊りまわる．

現地での果物は　バナナ・パパイヤが主で　このほかにマンゴ・ドリヤンも時時みられた．　値段は非常に安く 5centabo（日本円で９円）で15房くらいのバナナを買うことができた．

暑さについては　いまさら述べる必要もないと思うが日中　磁力計で測定していると　機械の上に連続して汗が落ちる．　磁力計の中にセットしてある温度計が37°Cを示しているので実際はもつと暑いものと思われる．ただ　ジャングルの日蔭に入ると幾分涼しくなる．

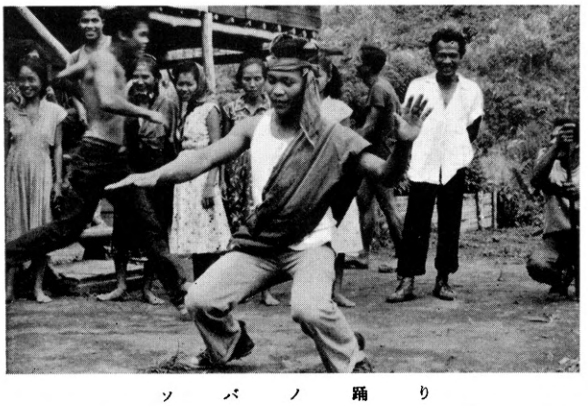
午後２時か３時頃になると毎日きまつてスコールがやつてきて　スコールがあると温度が下がる．しかし土質が粘土質なので急峻な地形のところでは　すべって進退共に不能となる．　また　このスコールに先がけて　風や竜巻が急激にやつてくることがある．　このような時枯れかかつた巨木や大枝が　突然頭上に倒れかかってくることがある．　ともかく　毎日が暑さの連続なので内地のように無理をして能率をあげても永続きはしない　結局ゆっくり仕事をしたほうが　能率がよいことになる．

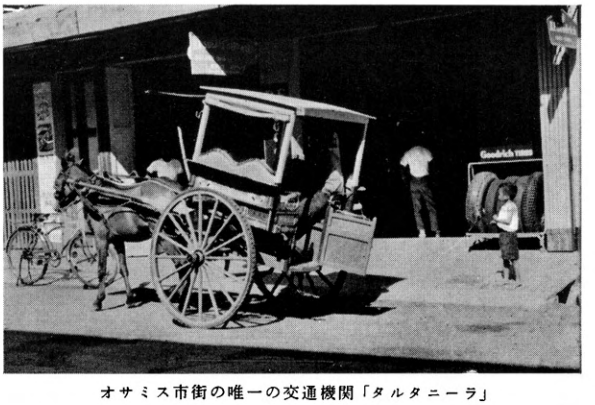

オサミス近傍の上流家庭の邸宅

また　仕事の休みには　人夫や近くのソバノ土人たちとダンスパーティーを開くこともある．　女達は赤・青・黄の原色のダンスドレスを着て　靴をぶら下げて裸足でやってくる．

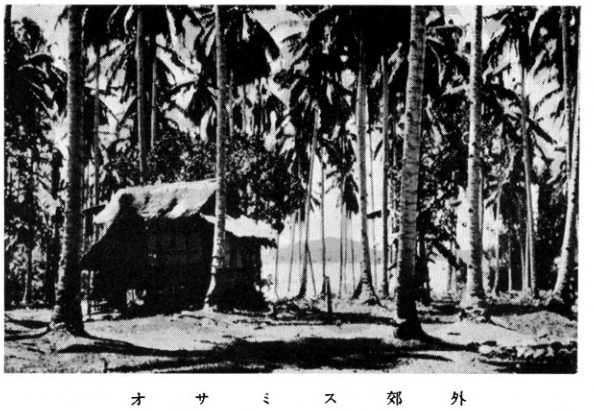
最後にフィリピン人の日本人に対する　印象について述べると　戦争時代の悪夢のためか　最初は日本人に対して非常に警戒心をもって接してきたが　日がたつにつれ次第に親しみを感じ　再来を望むほどになった．

（物理探査部　柴藤技官）


ソ　バ　ノ　踊　り


オサミス市街の唯一の交通機関「タルタニーラ」

盛装をしてヤシの実をたべる土民の娘たち


オ　サ　ミ　ス　郊　外